

出張報告

報告日 令和6年11月13日

会 派 名	暮らしと笑顔
報告者氏名	池野里美
種 別	☐ 調査研究（ ☐ 行政視察） ☒ 研修会 ☐ 要請・陳情 ☐ 各種会議
用 務	第29回清溪セミナー オンデマンド受講
日 時	R6/11/11(月) 10:00 ~ R6/11/11(月) 16:00
場 所 (会場)	オンデマンド録画受講
調査項目等	第29回清溪セミナー受講
概 要	【第29回清溪セミナー】 講義Ⅰ 『進化する里山資本主義』（株）日本総合研究所・主席研究員：■■■■氏 講義Ⅱ 『オーガニック給食の実践』 いすみ市役所農林課職員：■■■■氏 講義Ⅲ 『ゼロカーボンシティを目指して』 茂庭市長：太田昇氏
所 感 等	講義Ⅰ 『進化する里山資本主義』 ・■■氏の話は、世の中で起きている事を、うわさや空気ではなく、全数調査の数字を基に、事実を確認した内容なので、とても共感できた。質問形式で、やり取りしながら講義が進むので面白く、柏崎市の高校でも講義をして欲しいと感じる内容であった。日本の経常収支赤字の相手国の質問や、都心と地方とで比べた失業率、人口、所得などの比較など、数字で見ると、私がいかに思い込んでいたのかに気付かされ、たくさんの学びがあった。世の中は変化しているのに、頭の中は昭和のままの人が多いという言葉が胸に刺さった。これからは、地方の人手不足を活かして、元気な若者が戻るような施策に力を入れ、U I ターン人材の活躍の場を増やし、子どもを増やした田舎が、世界に先駆けて再生する！との言葉に、柏崎市の明るい未来を感じられる内容であった。 講義Ⅱ 『オーガニック給食の実践』 ・いすみ市で2013年から、12年間、有機米の生産の立ち上げからずっと関わってきた農林課の職員の方のお話で、地域の農業を活性化したい！子どもたちを元気にしたい！という熱い想いが伝わる素晴らしい事例だった。当初は、有機米を生産している農家がゼロという所からのスタートで、2017年には市内の小・中学校の給食で有機米100%を達成。民間や県、JAと市が連携し、水稻の有機栽培の実証事業を開始し、学校給食で使ってもらえるということで、慣行栽培をしていた農家も、少しずつ面積を増やしてい

き、4年で産地を形成することに成功。多くのメディアで取り上げられ、学校給食の残食が減少し、オーガニック給食のイメージで街の認知度が向上し、移住者や新規就農希望者が増加。農産物のブランド化にも力を入れ、農業所得も向上し、更に有機栽培に取り組む農家が増えるという好循環が起きている。他国と比較すると、イタリアでは、有機農産物の卸先の26%は学校給食。お隣、韓国では、2021年からソウルの全ての小・中・高校で、オーガニック無償給食が全面施行など、日本は世界と比べて、かなり遅れている。令和3年の農林水産省の「みどりの食料システム戦略」の中でも、耕作面積に占める有機農産物の取組面積の割合を25%に拡大とある。柏崎市においても、既に有機農産物の生産に取り組んでいる農家さんもいるので、豊かな自然環境を活かし、いすみ市を参考に、学校給食へ活用できるように変えていきたいと感じた。地産地消で安心な食を学校給食で提供することで、子育て支援にもつながり、生産する地元農家の活性化にもつながると感じるので、柏崎市でも取り組めるよう引き続き学んでいきたい。

講義Ⅲ 『ゼロカーボンシティを目指して』

・岡山県の真庭市は、森林が79.5%を占める市であり、地域資源を生かした取り組みはとても魅力的であった。特に、森林を活用した、鉄筋鉄骨に代わる新たな構造材CLTは、市内の小学校や図書館や公共施設などの建築に活かされていて、地産地消で素晴らしい取り組みであると感じた。木材を室内に活用すると、鉄筋や新建材の室内より、空気もよく生産性が向上することが分かっている。柏崎市においても、キッズマジックの施設に柏崎産の木を使うことが決まっているが、今後も積極的に柏崎産の木を活用し、森林の整備と合わせ、木材の需要と供給がうまく循環していくといいと感じる。他にも、「木質バイオマスなど地域資源を活用した取組」をCOP26で事例発表したり、生ゴミやし尿から液体肥料を作る生ゴミ等資源化事業などをしたり、興味深い取り組みを多くされているので、もっと学びたいと感じる講義であった。